

【報告2】 1

英国の事例からみるミュージアムライブラリーの可能性
——大英博物館、ヴィクトリア&アルバート博物館
(ナショナル・アート・ライブラリー) を中心に——

楯石 もも子*

目次

はじめに

1. ロンドンの公開ミュージアムライブラリー
2. 大英博物館 (The British Museum) と大英博物館図書館
(The British Museum Library)
 - 2.1. 大英博物館各部門図書室/スタディールーム
 - 2.1.1. 人類学図書館・リサーチセンター
(Anthropology Library and Research Centre = ALRC)
 - 2.1.2. エジプト・スーダン部図書室
(Ancient Egypt and Sudan Department Library)
 - 2.1.3. アジア部図書室/パーシヴァル・デイヴィッド・スタディールーム
(Asia Department Library/Percival David Study Room)
 - 2.1.4. アジア部日本セクション図書室
(Asia Department Japan Section Library)
 - 2.1.5. イギリス・先史ヨーロッパ部図書室
(Britain, Europe and Prehistory Department Library)
 - 2.1.6. ギリシャ・ローマ部図書室 (Greece and Rome Department Library)
 3. ヴィクトリア&アルバート博物館 (Victoria & Albert Museum=V&A)
 - 3.1. ナショナル・アート・ライブラリー (National Art Library=NAL)
- おわりに ——博物館図書室の役割と機能を考える——

キーワード ロンドン 博物館図書室 ミュージアムライブラリー 大英博物館図書館
円形閲覧室 ヴィクトリア&アルバート博物館
ナショナル・アート・ライブラリー

*東京都江戸東京博物館司書

はじめに

江戸東京博物館図書室（以下、当室）は、1993年の開室以来、学芸員等職員の業務・調査研究支援を行う内部向け図書室であり、蔵書を市民に公開する江戸東京の専門図書館であるという二つの面を持って活動してきた。図書資料も博物館が所蔵する様々な収蔵品の一部と捉え、永年保存を原則としているが、利用と保存の間で生まれる矛盾や収蔵スペースの不足、そして博物館をとりまく社会の変化もあり、25年を経て多くの課題も生じている。改めて博物館図書室として当室が持つべき機能と役割を検討するため、2018年3月に英国の図書館で訪問調査を行った。各機関では博物館図書室の運営、日本関係資料の扱い、書籍修復や資料デジタル化の実作業ほか様々な側面から今後の糧となる多くの示唆を得ることができた。本稿では、博物館図書室（ミュージアムライブラリー）として歴史の古い大英博物館内のライブラリーとヴィクトリア&アルバート博物館内にあるナショナル・アート・ライブラリーに焦点を当てて報告し、博物館図書室の機能と役割を考察したい。なお、ここで触れられなかった訪問機関については本誌掲載の小宮山めぐみの報告を参照いただきたい。

1. ロンドンの公開ミュージアムライブラリー

今回の訪問調査に先立ちロンドンで公開されている博物館図書室の状況を概観するために作成した一覧が【表1】である。ロンドン美術史図書館フォーラム(London Art History Libraries Forum)¹⁾、英国・アイルランドの図書館の蔵書横断検索サイトCOPACの参加館²⁾等から博物館図書室を抽出し、各館の

【表1】ロンドンのミュージアムライブラリー公開状況 2018

1 The British Museum	
	⇒ 【表3】参照
2 The National Art Library (Victoria & Albert Museum=V&A)	
	【利用条件】事前登録(Web申請可。写真付身分証明書要) 【OPEN】火・水・木・土 10:00-17:30、金 10:00-18:30 【蔵書数】85万点以上 【概要】美術史、デザイン関連全般。展覧会カタログ、オークションカタログ、漫画、電子資料も充実。1851年ロンドン万博関連資料、ダ・ヴィンチ手稿、工芸製本ほか様々な特別コレクションがある。アーカイブ資料、児童書・劇場関連資料はブライスハウスにある「アーカイブ&研究図書館スタディールーム」で管理。【サービス】レファレンス コピー(デジタルスキャンデータをUSBで持ち帰り可・無料)、ILL、郵送コピーサービス 【利用者】約3万人/年
3 Wellcome Library (Wellcome Collection)	
	【利用条件】事前登録(別途当日限り有効の利用カード発行) 【OPEN】月・火・水・金 10:00-18:00、木 10:00-20:00、土 10:00-16:00 【蔵書数】医療史関連80,000点 その他数千点 写本12,000点 【概要】医学研究支援団体が運営する美術館内にある図書館。医療史や医療に関する民族誌資料ではイギリスで最も重要なコレクションをもつ。開架図書と目的別に多数設置された閲覧席が充実している。快適な空間を提供するため館内の滞留利用者数を50人までに制限。英国デジタルアーカイブプロジェクト(UK Web Archive)でコレクションのWEB公開をしている。
4 Guildhall Library	
	【利用条件】要予約 【OPEN】月-土 9:30-17:00、水 9:30-19:30 【蔵書数】500,000点 【概要】1425年設立。ロンドンの歴史・文化に関する図書コレクションを持つ市立図書館。初期印刷本コレクション、地図、写真なども多数所蔵 【機関アーカイブ資料】刊行物、記録写真、図面、公文書、記事のクリッピング他 【スタッフ】12名(司書6、その他6) 【資料整理】ロンドン関係資料は独自分類 【サービス】レファレンス(来館・Eメール受付が多い) 【その他】学校向アウトリーチサービス、ロンドン史に関するセミナー開催、資料のデジタル公開(Europianaからアクセス)

5 Horniman Museum&Gardens Library	<p>【利用条件】研究者：要予約 【OPEN】月・火(第一日曜はファミリー向けオープンデイ。ファミリーイベント等で開放) 【蔵書数】30,000点(図書、雑誌、写真、展覧会カタログ、地図、手稿、版画、マイクロフィルム、DVD、電子ジャーナルほか) 【概要】1911年設立。ミュージアムと同様に、自然史、民族学、音楽に関する資料を収集。希少本、初期の自然史関連イラストレーションや写真のユニークな資料、Anna Atkins サイアノタイプ、Gosseのドローイング等のコレクションあり。別途館内にアーカイブ部門あり 【スタッフ】司書2名 【資料整理】分類：UDC 【サービス】レファレンス(メール、来館受付が多い) 【利用者】1,000人(2017年。一般利用者が多い)</p>
6 Museum of London, Library	<p>【利用条件】原則館内スタッフ向け。要予約 【OPEN】月一金 10：00-17：00 【蔵書数】40,000点 【概要】1912年London Museum設立。1972年Guild Hall Museumと合併し、現在に至る。ロンドン関係資料を収集。ペスト、ロンドン大火、クロムウェルに関する17世紀の特別資料コレクションあり。2022年に博物館移転の予定 【スタッフ】司書1名</p>
7 Wallace Collection Visitors Library and Archives	<p>【利用条件】要予約 【OPEN】火一金 10：00-17：00 【蔵書数】30,000点 【概要】1900年設立。美術館の歴史や絵画、装飾芸術、彫刻等、美術館の展示分野をカバーする図書資料を収集。希少本含む。 【機関アーカイブ資料】記録写真、建築写真、図面、公文書、記事のクリッピングほか 【スタッフ】司書2、アーキビスト1 【資料整理】独自分類 【サービス】レファレンス(手紙、来館での受付が多い) 【その他】図書イベント開催 【利用者】300人(2017年)</p>
8 Courtauld Gallery Library	<p>【利用条件】おもにロンドン大学関係者向け。一般利用者は事前登録 【OPEN】月一金 9：30-15：30 (大学関係者は異なる) 【蔵書数】200,000点 【概要】ロンドン大学の機関。世界中の美術館の展覧会カタログを収集(約6万点)、オークションカタログ、論文、パンフレット、電子リソースも豊富。</p>
9 Dana Research centre & library, Science Museum	<p>【利用条件】開架はフリーで利用可(London)、要予約(Wroughton) 【OPEN】月一金 10：00-17：00 (London)、 金 10：00-17：00(Wroughton) 【蔵書数】6,000点(London)、500,000点(Wroughton) 【概要】科学博物館内(London)と国立 コレクションセンター(Wroughton)の2施設あり。15-21世紀の科学技術、医学、博物館学に関する資料を収集。</p>
10 Imperial War Museum, Library	<p>【利用条件】要予約 【OPEN】月一木 10：00-17：00 【概要】イギリスと連邦国が関与した20-21世紀の戦争に関わる文献、写真、地図、オーラル・ヒストリー、美術資料を収集。</p>
11 London Transport Museum, Library	<p>【利用条件】要予約 【OPEN】博物館近接地：水・金 10：00-17：00 / アクトン：第一火曜日 10：30-16：30 【蔵書数】14,000点 【概要】ロンドンを中心に世界の交通機関の発展に関する図書資料を収集。</p>
12 National Gallery Library	<p>【利用条件】要予約 【OPEN】火一金 10：00-17：00 【蔵書数】図書：100,000点 雑誌：250タイトル 【概要】1870年設立。13-20世紀の西洋絵画に関連する書籍を収集。</p>
13 National Portrait Gallery Library	<p>【利用条件】要予約 【OPEN】火一金 10：00-17：00 【蔵書数】図書：35,000点 雑誌：70タイトル 【概要】イギリスの肖像画、歴史、ギャラリーの歴史、伝記に関する図書を収集。</p>
14 Natural History Museum Library	<p>【利用条件】要予約 火一木 10：00-16：00 【蔵書数】図書：400,000点 雑誌：22,000タイトル アート作品：350,000点 【概要】1881年に大英博物館から分離。自然史関連資料、図書に限らずドローイング等の平面作品も管理している。</p>
15 RIBA Library (Royal Institute of British Architects Library)	<p>【利用条件】事前登録 貴重書は要予約 【OPEN】火 10：00-20：00、水・金 10：00-17：00、土 10：00-13.30 (RIBA内) 【蔵書数】全体で4,000,000点、images：95,000点 【概要】世界中の建築/建築史に関する図書を収集。模型や図面、建築道具、写真を含む。V&A内にあるスタディールームからも資料を利用できる。</p>
16 Royal Botanic Gardens Kew's Library, Art & Archives	<p>【利用条件】要予約 【OPEN】月一金 10：00-17：00 【蔵書数】図書：300,000点 雑誌：5,000タイトル 地図：20,000点 【概要】160年の歴史を持つ植物学の図書館。コレクションには絵画や版画も含む。別施設では種も保管。</p>
17 Sotheby's Institute of Art Library	<p>【利用条件】サザビーズ研究機関のスタッフ/学生 【OPEN】月一金 9：00-19：00、土 13：00-18：00 【蔵書数】図書：22,000点 雑誌：60タイトル 【概要】サザビーズとクリスティーズのオークションカタログ(10年間分)</p>
18 Tate Gallery, LIBRARY & ARCHIVE	<p>【利用条件】要予約 【OPEN】月一金 11：00-17：00 【蔵書数】250,000点 【概要】1500年以降の英国美術、1900年以降の世界の美術に関する文献やカタログなど、写真、ポスター等のアーカイブがある。</p>
19 The Library of the Society of Antiquaries of London	<p>【利用条件】協会のフェロー。外部研究者は要予約 【OPEN】月一金 10：00-17：00 【蔵書数】図書：130,000点 雑誌：3,000 タイトル 【概要】1757年設立。古物研究では英国で最も大きい図書館。英国、ヨーロッパの考古学、建築、美術史、工芸に関する コレクション、特に15～19世紀発行の貴重書など中世資料が豊富。手稿、版画、ドローイング、組織アーカイブ資料も含む。</p>

公式ウェブサイトの掲載情報をもとに作成した。併せてオンライン・アンケートツールSurveyMonkeyを用いて得られた質問回答³⁾ から一部を補記している。

各館の状況を見ると、事前登録・予約制による公開、書籍以外にも様々なマテリアルを扱い、貴重な資料も閲覧対応をしている館が多いことがわかる。また、「ライブラリー&アーカイブ」という名称をたてた機関が複数あるように、博物館図書室が博物館のアーカイブ⁴⁾ と密接に関わって機能していることがうかがえる。

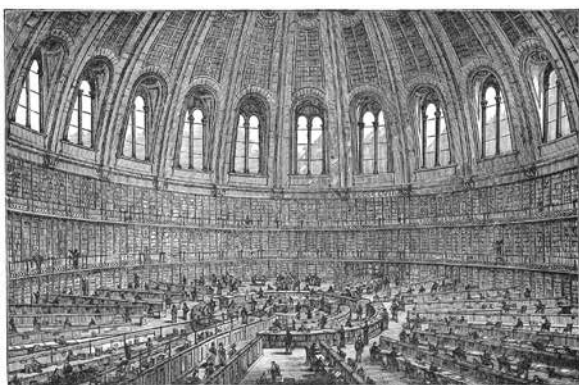
2. 大英博物館 (The British Museum) と大英博物館図書館 (The British Museum Library)

大英博物館は、英国ロンドンの中心部ブルームス・ベリーにある世界で最初の国立博物館である。ハンス・スローン卿 (Sir Hans Sloane, 1660-1753) が収集した書籍 (稀覯書)、コイン、動物・植物・鉱物標本、美術品等7万点余りのコレクションとコットン卿旧蔵書 (The Cottonian Library of books and manuscripts)、ハレー旧蔵書 (The Harleian collection of manuscripts) をもとに1753年に設立、1759年に開館した。以降、世界の文化を代表する様々な資料を収集し、現在のコレクション点数は800万を超える。(コレクションのうち自然科学標本は1881年開館の自然史部門分館〈現・ロンドン自然史博物館 The Natural History Museum〉へ、図書部門の資料は1973年に大英図書館〈The British Library〉へと移管されている。) 開館当初から広く無料公開されており、現在に至るまで世界中から訪れる多くの来館者を魅了し続けている。

大英博物館といえばドーム型の天井を持つ円形閲覧室 (Round Reading Room) を思い浮かべる人も多いだろう。創設時から博物館と国立図書館の機能を併せ持ち、図書資料群が博物館の重要なコレクションの一翼を担っていた。アントニオ・パニッツィ (Antonio Panizzi, 1797-1879) が主任



【写真1】大英博物館



【写真2】1800年代の円形閲覧室⁶⁾



【写真3】現在の大英博物館グレートコート

図書館長（現在の博物館館長）を務めた1852年には蔵書数が52万点に膨れあがり、1857年にそれらを集めるための円形閲覧室が博物館の中心である中庭、グレートコート（Great court）に完成した⁵⁾。円形閲覧室は質量ともに世界屈指の図書館となり、建造物の美しさからも大英博物館の象徴として多くの利用者・見学者を受け入れた。カール・マルクスやコナン・ドイル、オスカー・ワイルド、ウラジミール・レーニン、南方熊楠など著名人の利用も多く、彼らの利用記録（Reading card等）は大英博物館セントラルアーカイブ（The British Museum Central Archive）に残されている。

1973年の大英図書館の設立によって図書部門が博物館から分離し膨大な図書コレクションが移管されたが、新図書館竣工までの長期にわたり円形閲覧室が大英図書館の閲覧室として機能した。1997年、セント・パンクラスにようやく完成した大英図書館新館へコレクションを移転し、円形閲覧室内部と中庭を改修、2000年にはガラス屋根で覆われたグレートコートが完成する。同年、円形閲覧室には、大英博物館の来館者が誰でも自由に利用できるレファレンスライブラリーが公開された。2007年以降は、この中央図書館（Central Library）に下院（House of Commons）の蔵書を含めた共同コレクションをポール・ハムリン図書館（The Paul Hamlyn Library）と呼ぶようになる。ここには大英博物館の展示分野をカバーする様々な主題の参考図書、雑誌約5万点に加え、1762年までさかのぼる大英博物館のガイドブックや展覧会のポスターアーカイブ、エフェメラコレクション等も置かれていたという⁷⁾。2007年に特別展「兵馬俑」の会場となったことをきっかけに円形閲覧室の活用法が再考されることとなる。経費削減に伴い2011年にポール・ハムリン図書館は閉館した。円形閲覧室はその後2013年まで特別展示室として使用されたが現在は閉鎖され、今後の活用方法については検討中とのことである。

円形閲覧室よりも歴史が古く、かつて大英博物館内にあった図書館、キングスライブラリー（Kings Library）にも触れておきたい。6万冊を超えるジョージ三世（George III (1738-1820)）の旧蔵書を収容するため1827年に建てられ、現在の大英博物館では最も古い建物となっている。1997年、円形閲覧室の図書と同様にキングスライブラリーのコレクションもセント・パンクラスの大英図書館へと移された。大英図書館のシンボルともいえるキングスライブラリータワー（The King's Library Tower）に展示収納され、閲覧にも供されている。一方蔵書を明け渡したキングスライブラリーの部屋は、2000～2003年に開館250周年を記念して1820年代以前の内装に修復され



【写真4】大英博物館啓蒙主義ギャラリー
（旧キングスライブラリー）



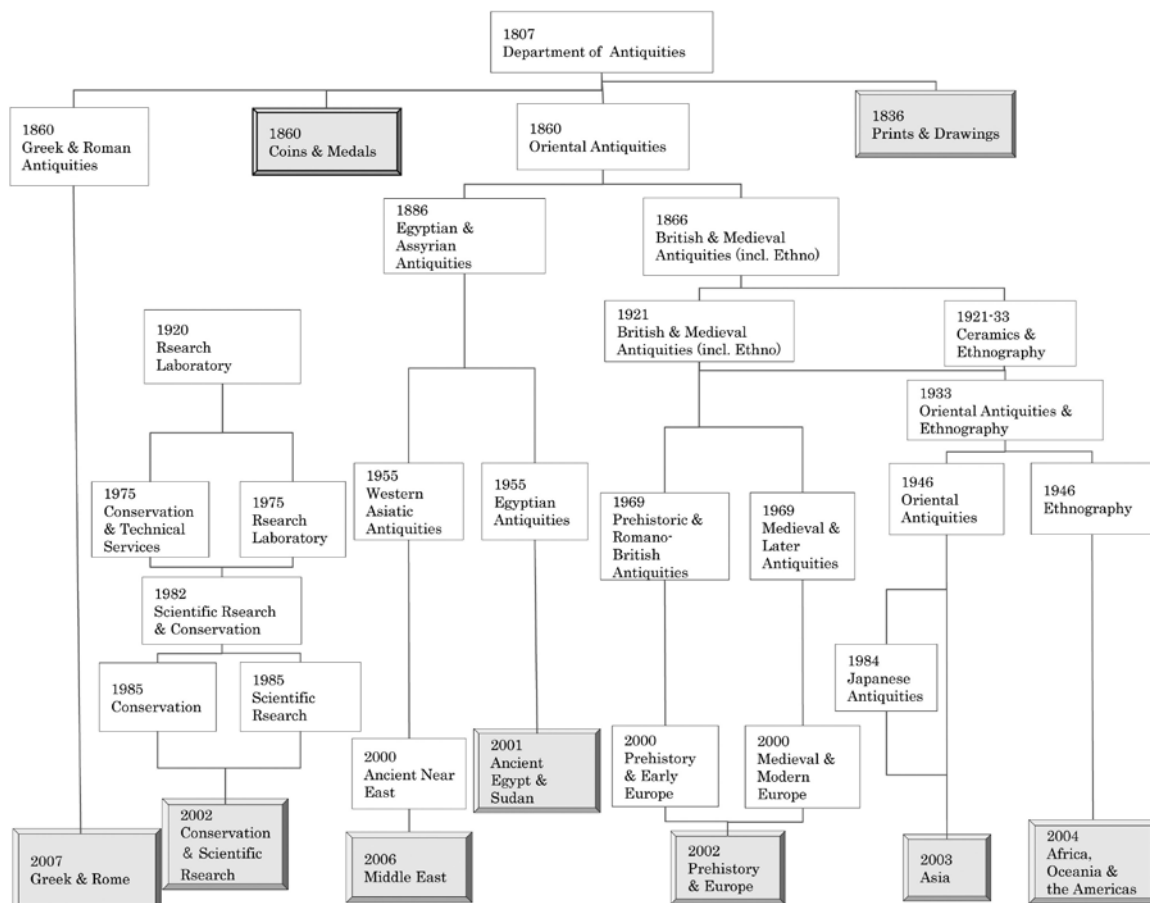
【写真5】大英図書館キングスライブラリータワー

た。現在は「啓蒙主義 (Enlightenment)」ギャラリーとなり、18世紀の世界を象徴する様々な資料が展示されている。空いた書棚には下院図書館 (House of Commons Library) から長期借受している18世紀の書物が収められ、展示の一部をなしている⁸⁾。

後述する学芸部門の図書室もかなり古くから機能しており、大英博物館がミュージアムライブラリーの嚆矢であることを再認識した。

2.1. 大英博物館各部門図書室/スタディールーム

大英博物館のコレクションは地域・主題別の学芸部門によって管理され、そのほとんどに図書室を併設するスタディールーム (Study room/Library) がある。学芸部門は大英博物館の260年にわたる歴史の中で幾度も分岐・統廃合を重ねており【表2】、部門再編によって管理する資料を分配統合する困難や多少の混乱が生じたであろうことが想像できる。現在は9部門 (11室) のスタディールーム・図書室が公開されている⁹⁾。



【表2】大英博物館学芸部門の変遷¹⁰⁾
(二重枠内は現行の部門)

5部門 (6室) の図書室で担当司書にインタビューを行い、閲覧室と書庫を見学、特徴的な図書資料やアーカイブ資料等を案内していただいた。各部門図書室の基本データ【表3】と併せ、雑感を含めた訪問先の概要を以下に記す。

【表3】大英博物館各部門図書室・アーカイブ一覧

1 人類学図書館・リサーチセンター: Anthropology Library and Research Centre (ALRC)
<p>【利用条件】利用登録(写真付の身分証明書が必要) 【OPEN】月・火・水・金: 10:00-17:00、木: 12:00-17:00</p> <p>【概要】大英博物館の民族学図書館と英国王立人類学協会(RAI)の図書館の合併で創設された世界でも主要な人類学図書館。人類学のすべての分野、世界的な地域をカバーする広範囲な主題を収集。手稿など貴重書コレクションには16世紀までさかのぼる資料が含まれる。大英博物館内の各図書室の総合窓口的な業務も担う。</p> <p>【蔵書数】126,502点(2018年1月現在): 図書10,2464、雑誌3,617タイトル(定期購読誌1,500以上)、パンフレット16,782、貴重書1,328、手稿84、地図211、マイクロフィルム698、AV350、電子リソース800、電子ブック51、その他177</p> <p>【コレクション】クリスティーズ・コレクション: 特にアフリカ、アメリカ(南北)、アジア、オセアニア、ヨーロッパの紀行・探検に関する資料 【スタッフ】統括司書1、文献サービス2、閲覧サービス2、雑誌1、システム電子リソース1</p> <p>【年間購入予算】図書約30,000 £、逐次刊行物約70,000 £ 【資料整理】分類: ブリス(BLISS: 社会学分野の詳細な分類体系)</p> <p>【サービス】閲覧席: 25以上 レファレンス: メールでの受付が多い コピー: 10ペンス/1枚 撮影: 個人の研究目的に限り可 WiFi完備</p> <p>【利用者】現在の有効登録者数は約800人。2014年以降の登録者総数は2,127人(研究者・学生が多い。英国内外から利用あり)</p> <p>【その他】研究セミナーを年6回開催</p>
2 エジプト・スーダン部図書室/アーカイブ: Ancient Egypt and Sudan Department Library and Archive
<p>【利用条件】事前予約 【OPEN】月~金: 10:00-13:00、14:00-16:45</p> <p>【概要】世界有数の大英博物館エジプト・スーダンコレクションを支えるエジプト学の図書館。1860年頃から活動している。古代エジプト・スーダン文化のあらゆる時代を網羅。1636年刊行図書や19世紀までの雑誌を含む貴重書コレクション、ロキシウォーカー・コレクション(生物考古学に関する書籍)がある。</p> <p>【蔵書数】約25,000点: 図書、雑誌200タイトル以上(定期購読誌80)、展覧会カタログ2,400、オークションカタログ、パンフレット、マイクロフィルム、電子リソースほか</p> <p>【スタッフ】パートタイム司書アシスタント1名、ボランティア2名(1日/週) アーカイブセクションにアーキビスト1名</p> <p>【年間予算】約14,000 £ (収集10,000、データベース運用2,000、修復2,000)</p> <p>【資料整理】分類: 独自分類/目録規則: 英米目録規則(AACR)⇒RDA 雑誌・文書は独自インデックスを用いて整理</p> <p>【サービス】レファレンス: メール受付が多い コピー: 10ペンス/1枚 撮影: 個人の研究目的に限り可</p> <p>【利用者】111名/2017年(研究者、学生が多い)</p>
3 アジア部図書室/パーシヴァル・デイヴィッド・スタディールーム: Asia Department Library / Percival David Study Room
<p>【利用条件】事前予約 【OPEN】水・木・金 10:30-13:00、14:00-16:00 (スタディールーム)</p> <p>【概要】アジア部のギャラリー展示や収蔵資料の領域をカバーする中国・日本・東南アジア・チベット等の図書資料を収集。日本関係は後述の日本セクションで管理している。</p> <p>【蔵書数】図書約60,000点、雑誌、展覧会カタログ、写真、地図、写本、文書、絵画、版画、DVD、CD-ROM、マイクロフィルム、電子リソースほか</p> <p>【コレクション】クリスティーズ・コレクション(アジアの紀行・探検)、レアブックス、韓国基金寄贈書、部門長寄贈書</p> <p>【機関アーカイブ資料】館の刊行物、ポスター、ちらし、リーフレット、運営に関わる文書類、記録写真、掲載記事のクリップング、Webページほか</p> <p>【スタッフ】司書1名、ボランティア6名(日本・韓国関連の司書経験者3名、中国語関連1名、東南アジア関連1名)</p> <p>【年間予算】約10,000 £ (図書5,900、雑誌1,400、雑誌の合本1,400)</p> <p>【資料整理】分類: 米国議会図書館分類表(LCC)、雑誌類はアルファベット順、一部独自分類(日本関係)</p> <p>【利用者】2016年実績: 図書室9名(研究者・学生が多い)、収蔵品閲覧83名、スタディールーム17名、資料識別サービス14名</p> <p>【その他】外部機関の司書や司書訓練生に向けたライブラリー・ツアーを実施</p>
4 アジア部日本セクション図書室: Asia Department Japan Section Library
<p>【利用条件】事前予約 ※18歳以上</p> <p>【概要】日本美術に関する図書を収集。2002年に日本部がアジア部に吸収されてアジア部日本セクションとなったが、現在も日本セクションは独立した図書室を構えている。 【蔵書数】約7,000点(図書、雑誌ほか)</p> <p>【スタッフ】専任司書不在(セインズベリー日本藝術研究所リサ・セインズベリー図書館の司書1名が月1回程度来館し、収書や目録作業を遂行している) 【年間予算】アジア部の予算で新本購入を行っている</p> <p>【資料整理】分類: 独自分類(主題のアルファベット順) 新規受入れ図書はNACSIS-CATに登録(約3,800件登録済)</p> <p>【サービス】レファレンス(学芸員が対応。メールでの問い合わせが多い) 撮影可</p> <p>【利用者】外部利用は図書よりも収蔵資料閲覧の方が多し</p>
5 イギリス・先史ヨーロッパ部図書室・アーカイブ: Britain, Europe and Prehistory Department Library and Archive
<p>【利用条件】事前予約 【OPEN】火・水・木 10:30-13:00、14:00-16:00 (スタディールーム)</p> <p>【概要】19世紀後半設立。イギリス・ヨーロッパの考古学、装飾美術、博物館学、時計・機械関連の図書を収集。</p> <p>【コレクション】19世紀以降のオークションカタログ、AW Franks旧蔵書</p> <p>【蔵書数】約40,000点(図書、逐次刊行物(600タイトル)、展覧会カタログ、写真、地図、手稿、文書、DVD、CD-ROM、電子リソース)</p> <p>【機関アーカイブ資料】館の刊行物、記録写真、公文書、掲載紙、収蔵品に関する情報ほか</p> <p>【スタッフ】司書1名(アーキビストを兼務) 【年間予算】23,000 £ (収集19,600、修復3,400)</p> <p>【資料整理】分類: UDC(国際十進分類法)、専門書・論文には独自分類 アーカイブ資料はリスト管理</p> <p>【サービス】レファレンス(メールでの受付が多い) コピー: 10ペンス/1枚 撮影: 個人の研究目的に限り可</p> <p>【利用者】50人(2017年図書のみを閲覧した外部利用者)</p>

6 ギリシャ・ローマ部図書室 : Greece and Rome Department Library	
【利用条件】事前予約 【OPEN】水～金：10：30-13：00、14：00-16：00（スタディールーム）	
【概要】1860年創設。1895年に現在の場所に移転し、このときから誰でも利用できる図書室として開かれている。収集分野はギリシャ・ローマの考古学、歴史、美術品（壺・ブロンズ・ガラス・陶器）等に関するものが多い。18世紀の大英博物館見学者向けガイドブック等自館の歴史に関わる資料も多数ある。	
【蔵書数】約30,000点	
【機関アーカイブ資料】収蔵資料登録簿（レジストリ記録）、学芸員の調査記録（例「チャールズ・ニュートンのノート」、「ジョン・タートルの発掘記録」）、問合せ記録・手紙類ほか	
【スタッフ】司書1名 【サービス】レファレンス 撮影：個人の研究目的に限り可	
【利用者】研究者が多い 【その他】スタディールームではグループワークショップ等を行っている	
7 コイン・メダル部図書室 : Coins and Medals Department Library	
【利用条件】事前予約 【OPEN】火・水・木 10：30-13：00、14：00-16：00（スタディールーム）	
【概要】世界的な貨幣図書館のひとつ。貨幣学の歴史や古代のコインから現代芸術の要素を持つメダル・バッジまで、大英博物館のコレクションを反映するような図書資料を収集。他では見ることができない資料も多い。	
【蔵書数】図書20,000点以上、雑誌約600タイトル、パンフレット、販売カタログ 【その他】スタディールームでは学校向け、教師向け、グループ単位を含む、貨幣に関わるユニークな教育プログラムを実施している	
8 保存科学部図書室 : Conservation and scientific research Department Libraries	
【利用条件】事前予約 ※国認定の学術機関等で保存科学のコースを受講している学生に限る。指導教官の紹介状が必要	
【概要】2002年に保存部と科学調査部が合併されてできた部門のため、保存・科学に関するすべての領域をカバーする2つの図書館がある。	
9 中東部図書室 : Middle East Department Library	
【利用条件】事前予約 ※他館で利用できない資料に限る	
【OPEN】火～金：10：30-13：00、14：00-16：00（スタディールーム）	
【概要】中東の新石器時代、古代文明、現代美術までを網羅する大英博物館の収蔵品と中東地域に関する図書を扱う。大英博物館の中でも珍しいビクトリア朝様式のアーチ型の部屋を利用。	
10 版画・素描部図書室 : Prints and Drawings Department Library	
【利用条件】事前予約（スタディールーム） 【OPEN】火～金 10：30-13：00、14：00-16：00	
【概要】西洋の版画と素描に関する図書資料を扱う。19世紀以降の参考書が中心だが、時代の古い貴重書やイラストレーションも含まれる。重要なコレクションには印刷業者カタログ、オークションカタログ、ロビン・ド・ビューモント・コレクション（1860年代ルネッサンス期の貴重書を含む）がある。	
【蔵書数】図書約50,000点、雑誌 【サービス】レファレンス：電話・FAX、手紙で受付	
【その他】スタディールームは、グループ訪問、授業での利用が可能	
【利用案内ガイドブックの発行】	
・ A. Griffiths and R. Williams, The Department of Prints and Drawings in the British Museum: User's Guide (1987)	
・ D. Paisley, A Catalogue of German Books before 1800 in the Department of Prints and Drawings (2002)	
11 大英博物館セントラルアーカイブ : British Museum Central Archive	
【利用条件】事前予約 【概要】1753年創設期の行政記録を含む博物館運営資料や大英博物館全体に関わる公文書を所蔵している。博物館の管理委員会の議事録、買収報告と管理、政策、財務記録が含まれる。	
※展示や収蔵品に関する記録の多くは各学芸部門で管理	
※大英博物館の記録のうち、大英図書館、国立公文書館（建築記録等中央政府の記録）で保管されている資料あり	

各図書室は独立した専門図書館として図書資料の収集管理、運営を行っている。とはいえ収集対象が重なる部分も多く、収書やレファレンスなど互いに連携をとりながら業務を遂行しているという。各部の蔵書目録（OPAC）は大英博物館のライブラリー・カタログ・オンライン¹¹⁾に統合されワンストップで横断検索ができ、英国の図書館横断検索サイトCOPACからもアクセスが可能である。

大英博物館では資料のパブリック・アクセスが徹底されており、申請があれば図書に限らず「すべての収蔵品（Objects）」を「誰にでも」閲覧提供する体制がとられている。スタディールームの多くは閲覧室を兼ねており、図書だけではなく部門で管理する収蔵品の研究閲覧サービス、依頼者が持参した資料について学芸員に助言を求めることができる資料識別サービス（Object identification service）を提供している（事前申請要。持込資料の真贋鑑定書の作成や評価は行わない）。各部門ともスタッフの目の届く位置に貴重資料閲覧にも対応できる大きなサイズの机が設置され、資料保護のために用いるクッ

ションや書見台等が用意されていた。

館のデジタルアーカイブ事業推進により、収蔵品の多くは大英博物館コレクションオンライン¹²⁾で公開されている。メタデータには資料の基本情報に加え、来歴や展覧会出品履歴、参考文献も記載されている。図書資料に関しては各部門ともデジタル化への着手が進んでおらず、予算確保が目下の課題だという。保存修復については、館内のスタジオに修復を依頼できるのは収蔵品と限られた貴重書であり、展示・貸出・撮影等のタイミングで修復される流れが多いようだ。一方、図書資料に関しては予防的措置として貴重書の別置管理やケースでの保護、雑誌の合冊製本を外注（アジア部ほか）しているほかは、技術のあるボランティアによる修理（エジプト・スーダン部）、司書が簡易補習（アジア部）と、現状ではあまり手が回っていないということだった。

展示や収蔵品に関する記録や問い合わせ記録の多くは各学芸部門の図書室やアーカイブで管理し、創設期の行政記録を含む博物館運営資料や大英博物館全体に関わる公文書は大英博物館セントラルアーカイブに収められている。各部門では収蔵品の取得や学芸員の調査に関わる記録等のアーカイブ資料を重要なコレクションと位置づけ、独自のリストやインデックスで管理していた。いずれは目録をオンライン化し、部門を越えて統合的にアクセス・活用できることが理想であろう。

2.1.1. 人類学図書館・リサーチセンター（Anthropology Library and Research Centre=ALRC）

大英博物館の民族学図書館と英国王立人類学協会（Royal Anthropological Institute=RAI）の図書館の合併により創設された世界でも主要な人類学図書館のひとつであり、人類学のすべての分野、世界的な地域をカバーする広範囲な主題の図書資料を収集している。その中には日本関係資料も含まれる。特筆すべきコレクションに1865年にヘンリー・クリスティが大英博物館に寄贈した世界の紀行・探検に関する資料群があり、16世紀の



【写真6】人類学図書館・リサーチセンター

手稿本も含まれる。充実した雑誌コレクションは4,000タイトル（定期購読1,500）を有し、RAIが作成する人類学索引オンライン（AIO）の基礎文献にも用いられている。

ALRCは入口へのアクセスも良く、開かれた図書館という印象を持った。大英博物館内にある各図書室の総合窓口的な機能も担い、館全体の電子リソースプラットフォームの管理運営、職員のM25コンソーシアム¹³⁾利用者登録、レファレンス協力も請け負っている。広範な収集対象地域は他部門と重なる部分が多く、部門同士の日常的な連携が欠かせないという。密接な関係のあるRAIをはじめ、M25ほか外部機関との連携もある。なお、旧ポール・ハムリン図書館の蔵書の一部はこちらからアクセスできる。

2.1.2. エジプト・スーダン部図書室（Ancient Egypt and Sudan Department Library）

大英博物館の古代エジプト・スーダンのコレクションは世界で最も重要なコレクションのひとつであ

り、それを支える図書室は1860年頃から機能していた。世界中で出版された古代エジプトとスーダンの文化に関する図書資料を網羅する世界有数のエジプト学の図書館といえる。例えばエジプトの宝石について調べたい場合、考古学的な資料、美術工芸的な資料の両面からアプローチができる蔵書構成になっている。1600年代発行の図書を含む貴重書コレクションも有する。



【写真7】エジプト・スーダン部図書室

部門では館内のエドゥケーターと連携したイベントの開催やこども向けパンフレット制作などの教育事業も行う。「EES」(エジプト学のネットワーク)のメーリングリストでは文献情報の交換(選書にも役に立っている)や調査協力等を行っている。

また、部内にアーカイブセクションがあり、アーキビスト1名が配置されている。19世紀にエジプト部長を務めたバーチ氏による1837～1880年の手書きの収蔵資料登録簿(レジストリ記録)や各時代の問い合わせ記録(手紙等)等があり、独自のインデックスを作成して管理している。

2.1.3. アジア部図書室/パーシヴァル・デイヴィッド・スタディールーム (Asia Department Library/Percival David Study Room)

アジアギャラリーの展示や収蔵資料の領域をカバーする中国、日本、韓国・北朝鮮、東南アジア(タイ・カンボジア・ビルマ・インドネシア)、南アジア(インド)、チベット・ネパール関係資料を収集する。日本関係資料は後述の日本セクションで管理している。アジア言語で書かれた書籍は1800年代初頭から所蔵していたが、部門は1860年創設の東洋古物部(Oriental Antiquities Department)にはじまる。現アジア部は2002年に東洋古物部と日本古物部(Japanese Antiquities Department)が併合して今に至る。



【写真8】アジア部図書室

学芸員の専門分野や基金、図書の寄贈といった収集対象国からの協力の有無によって収集分野に偏りが出てしまうことは否めないという。台湾故宮をはじめとするアジアの博物館5館と定期的な図録交換をしているが、日本の博物館刊行物については情報入手が難しいとの意見をいただいた。今後は当館からも図録や情報提供等の相互協力関係を築いていきたいと考えている。CILIP(イギリス国内の司書メンバーのパートナーシップ)、ARLIS/UK&Ireland(イギリス・アイルランドの美術図書館連盟)での情報共有や調査協力、大学・学校等への教育支援も行っている。

2.1.4. アジア部日本セクション図書室 (Asia Department Japan Section Library)



【写真9】アジア部日本セクション図書室

2002年に日本部がアジア部に吸収されてアジア部日本セクションとなったが、現在も独立した図書室・研究室を構えている。2006年以降は専任司書の配置がなく、大英博物館とセインズベリー日本藝術研究所の共同研究協定の一環として、リサ・セインズベリー図書館の司書が月1回程度来館して図書購入手続きやデータ登録等の作業を行っている¹⁴⁾。図書の整理には独自分類を採用、

NACSIS-CAT¹⁵⁾へ書誌データを登録しており、現在は3,800件程度が検索可能である。新本はアジア部予算で購入しているが、M25の協力関係で利用できる図書館、特に徒歩圏内にある大英図書館やSOAS, University of Londonに所蔵されている資料は原則購入していない。価値判断の難しい現代資料(マンガ・工芸品ほか)に関する選書は学芸員の感性に委ねられている部分が大きく、各担当学芸員のセンスに対しては厚い信頼が寄せられているという。訪問時には2019年開催予定の「マンガ展」準備のために集められた新旧・ジャンルも様々なマンガが書架の一角を占めており、興味深く拝見した。

日本セクションで管理する収蔵品は、立命館大学アート・リサーチセンター (ARC) の協力でコレクション毎にデジタル化が進み、大英博物館コレクション・オンラインのほか、根付3Dアーカイブ¹⁶⁾、大英博物館浮世絵閲覧システム¹⁷⁾、大英博物館古典籍閲覧システム¹⁸⁾がWEB公開されている。このほか、国際日本文化研究センターとの協同研究、展覧会開催やJLG (JapanLibraryGroup=イギリスの日本関係図書館ネットワーク)、EAJRS (日本資料専門家欧州協会) との情報共有等、連携をしている外部関連機関も多い。

2.1.5. イギリス・先史ヨーロッパ部図書室 (Britain, Europe and Prehistory Department Library)

イギリス・先史ヨーロッパ部は、1807年創設の考古部を前身とし、その後幾度も部門の統廃合を重ね2002年の先史・ローマ英国部、中世後期古美術部の合併で現在に至る。現閲覧室は120年前に大英博物館新聞室であった部屋と書架を利用している。世界各地の旧石器時代とイギリス・ヨーロッパの歴史・装飾芸術に関する資料を収集している。

部門の歴史が古く、初期大英博物館のアーカイブ資料が豊富に揃う。担当司書1名がアーキビストを兼務し、独自リストを作成して管理にあっている。古いものでは1771年発行の展示カタログ(1827年以降、ほぼ毎年発行されている)、手書きのレジストリ記録(資料取得日、来歴の詳細、購入・寄贈の経緯、材質・大きさと、親指の爪ほどの大きさのスケッチが記されている。1856年以降



【写真10】レジストリ記録 (1856年)
(大英博物館理事会の許可を得て掲載)

は年単位でまとめられている)があり、アーカイブ資料については部門の祖を同じにするアジア関連のものも所蔵している。

2.1.6. ギリシャ・ローマ部図書室 (Greece and Rome Department Library)

ギリシャ・ローマ部の創設は1860年でハリカルナッソス遺跡を発掘したチャールズ・ニュートンが初代部長を務めた。その頃から図書室として機能していたが十分なスペースがなく、現在の場所に移転した1895年から誰でも利用できる図書室として開かれている。訪問時には学芸員が講師となり大学生向けにオブジェクト採録のワークショップが行われていた。

収集分野はギリシャ・ローマの考古学、歴史、美術品(壺・ブロンズ・ガラス・陶器)等に関するものが多い。図書資料は主に対象地域ごとに分類し、書架に制約があるため図書の寸法(高さ)別に配架している。

18世紀の大英博物館見学者向けガイドブックや自館の歴史に関わる資料も多数あり、レジストリ記録や「ニュートンの調査記録ノート」、「ジョン・タートルの発掘記録」(調査経過を伝える手紙に資料No.を補記したもの)、「大英博物館宛の問い合わせ記録・手紙類」(手紙、調査依頼、売買記録等が1861～1960年まで年1冊毎に製本されている。受取の日付、対応した担当者名を明記。中にはオスカー・ワイルド筆の手紙(1887年)もある)等を見せていただいた。



【写真11】ギリシャ・ローマ部図書室



【写真12】18世紀のガイドブックや問い合わせ記録ほか(大英博物館理事会の許可を得て掲載)

3. ヴィクトリア&アルバート博物館 (Victoria & Albert Museum=V&A)

ヴィクトリア&アルバート博物館は、ロンドンのサウス・ケンジントンにある芸術とデザインを専門とする国立博物館である。様式・時代を問わず全世界の美術工芸品から日用品までを幅広く収集し、古美術・陶磁器・家具・服飾・ガラス細工・宝石・写真・彫刻・染織・絵画・工



【写真13】ヴィクトリア&アルバート博物館

業製品など収藏品は500万点、展示資料は4万点にのぼる。ロンドン万国博覧会（1851年）の出品資料と収益を元に1852年に開館した産業博物館（Museum of Manufactures）を前身とし、その後、装飾美術館（Museum of Ornament Art）と改名、1857年に現在地へ移りサウス・ケンジントン博物館（The South Kensington Museum）と改名し、1899年ヴィクトリア&アルバート博物館となった。

3.1. ナショナル・アート・ライブラリー（National Art Library=NAL）

ナショナル・アート・ライブラリーは、V&A内にある国立の芸術図書館である。その歴史は古くV&A創設以前にさかのぼる。1837年サマセットハウスに設立されたデザイン学校の図書館を前身とし、1884年に現在の閲覧室に移り今に至る。パブリックなレファレンスライブラリーであるとともに、V&Aスタッフへの研究支援と学芸員の展示・研究用資料の収集管理を行っている。V&Aの学芸部門のひとつであるワード&イメージ部（Word and Image department



【写真14】 ナショナル・アート・ライブラリー

=WID) に属し、版画や図面、写真、手稿、図書、デジタル資料、アーカイブ等包括的なコレクションを形成している。NALはV&Aの展示テーマ、収藏品に関わる図書を中心に美術史、デザイン関連全般を収集対象とし、現在の蔵書数は図書と手稿が85万点以上、雑誌は1,100タイトル（カレント受入数650タイトル、週に100タイトル増加）にのぼる。その内容は、レオナルド・ダ・ヴィンチ手稿をはじめV&Aで展示される貴重資料から現代アーティストの写真集まで幅広い。特に展覧会カタログとオークションカタログは世界有数のコレクションであり、「NALに来ればアート市場の動きがわかる」と、誇れるような蔵書構成になっている。

V&Aの創設に関わるロンドン万博関連資料（ドキュメント、カタログ、図書、エフェメラ類など様々なマテリアルが含まれる）は、館の歴史を語る重要な資料群として特別委員会の助成金によってデジタル化されている¹⁹⁾。このほか多岐にわたるNALの特別コレクションの概要はウェブサイトで紹介されている²⁰⁾。V&Aの組織アーカイブ資料は、ビアトリクス・ポター・コレクションや児童書・劇場関連資料とともに、オリンピア近郊ブライスハウスにある「アーカイブ&研究図書館スタディールーム」で管理されている。

年間約3万人の利用者のうち学生が5割を占め、研究者、ライター、オークション関係者、デザイナー、一般利用者が訪れている。2017年にOPAC²¹⁾が刷新されて世界規模の図書館協同目録WordCat²²⁾を通じて世界中から蔵書へのアクセスが容易になり、ILL（図書館間相互利用）にもつながっているという。実際にOPACで検索してみたところ、多言語表示にも対応しており、たいへん使いやすい。その影響もあってか、以降は来館者、レファレンス、閲覧図書ともにその数は更に増加傾向にあるという。ウェブサイト案内している主題ガイド²³⁾等のレファレンスツールも図書資料へのアクセシビリティを高め



【写真15】貴重書閲覧席

ているといえるだろう。

閲覧室にはレファレンスブックのみを配架しているが、オンライン資料の増加に伴い開架図書は減少している。V&A各部門の学芸室に収蔵されている図書もカタログ化し、NALを通じて閲覧することができる。書庫のスペース不足はNALが抱えるもっとも重要な問題のひとつで、閉架図書はスペース確保のために図書の大きさ（高さ）毎に受け入れ順で配架している部分もある。

大英博物館と同様に、NALでも資料のパブリック・アクセスが重要視されており、ダ・ヴィンチ手稿等ごく一部の特別な資料とV&Aで展示中のものを除けば、ほぼすべての蔵書を閲覧請求することができる。カウンターに近く職員が目が届く位置に貴重書閲覧席を設け、ばらばらになりやすい一枚もののドキュメント

等は閲覧提供の前後で重さを量ることで抜き取り被害を防止している。訪問時にも多くの利用者があり、資料保護のためのクッションを用いて貴重書を閲覧し、写真撮影をする様子が見られた。また、WIDの版画・素描スタディールーム（Prints and Drawing Studyroom）には、「Japanese Print Education Book」と題して、美人画、役者絵、武者絵、風景画など様々なタイプの浮世絵原本を30～40枚取りそろえて設置されており、誰でもすぐに閲覧できるという。別途訪問したV&A東洋部においても収蔵資料の浮世絵や版本も申請があれば閲覧に対応している。過去に大規模に開催した浮世絵展のカタログを参考に閲覧申請する利用者が多いため、該当展覧会の出品資料をマットに挟みカタログ掲載順に保存箱にまとめて収納する、といった出納時の手間を減らす工夫もあった。

おわりに ——博物館図書室の機能と役割を考える——

今回の英国訪問全体を通して「パブリック・アクセス」という言葉を幾度耳にいただろうか。インターネットを介してメタデータや画像など収蔵品情報を広く提供することに加え、オリジナル資料も閲覧に供する体制がとられている。「博物館のすべての収蔵品は公共の財産として開かれるべきで、閲覧提供は博物館の果たす社会的使命のひとつ」という認識が浸透していることに感銘を受けた。大英図書館の東アジアセクションでも、オリジナルの文献資料へのアクセスの良さから日本資料の閲覧のために日本から訪れる研究者が多いと聞いた。利用と保存は対極にあり「資料を永く後世に伝える」という博物館の使命やそのために必要な人員配置を考えると難しい部分もあるが、原資料の持つ情報量、影響力は他に代えがたいものがあり、それを必要とする研究者も多い。

大英博物館の各部門図書室の多くはいわゆるワンパーソンライブラリーであり、博物館内部や外部機関と協力関係を築くことで補っている部分が見受けられた。特に、各部門はひとつの博物館のようであり、その中で学芸員や司書、アーキビスト、その他の職の人たちが密につながり、チームとして日々の

業務に当たられている様子が伺えた。図書室の蔵書に学芸員の研究分野が色濃く反映することも、他にはないコレクションが形成される所以であるように思う。

博物館の歴史や収蔵品に関わるドキュメント、アーカイブを重要なコレクションの第一にあげていたことも印象に残った。世界的に重大な発見を興奮を持って報せる学芸員の手紙や、来歴や参考文献が記されたレジストリ記録、展示の変遷を追えるガイドブック、それを当時の人々がどのような感動を持って受け止めたかを伝える記事等々、いずれも博物館における今後の展示や研究、さらに一般利用者にとっても収蔵品や主題研究に役立つ一次資料となっている。アーカイブ資料やドキュメントを案内してくれた司書の面々からは、収蔵品や学芸員が積み重ねてきた仕事、そして記録を保存管理してきた図書室の存在を誇らしく思っている様子が伝わってきた。アーカイブ資料の管理には図書整理とは違うスキルを要し、図書室とは別にアーカイブを専門に扱う人材や部門が館内にあることが理想であろう。しかし、そうした余裕のある館は決して多くない。図書室がその役割を担うこと、もしくはその役割を担う部門と密接に関わりながらサポートすることは自然な流れであるといえるだろう。そのためには部門を越えた調整を続けることが不可欠で、一定の年限をもって廃棄される文書や一過性のエフェメラ等、散逸しやすい資料の収集管理については、すぐにでも検討に取り掛かる必要があることを痛感した。

各機関を見せていただく中で、博物館がリアルな「モノ」を収蔵し、人が集まる「場」であり、「公共施設」であること、そして博物館自体が「記録資料を生み出す現場」であることを強く意識させられ、その活動を支えることが博物館図書室がその独自性を発揮し社会の中で貢献する道なのではと思いついた。2011年に閉館した大英博物館のポール・ハムリン図書館は、館内のどこからもアクセスが良く、充実した参考図書と館に関わるドキュメントを提供していたという。展示を見たその熱が冷めないうちにふらりと立ち寄れるこの図書館は、博物館図書室の理想の形のひとつであったのではと、想像する。

博物館図書室の機能については、「①所蔵品に関わる資料と、②展覧会に関わる資料を持ち、③所蔵品や展覧会の企画、調査を業務とする学芸員の研究支援のためにある」²⁴⁾等、これまでも論じられてきたが、江戸東京博物館図書室の活動を振り返り、大英博物館とNALの事例を併せて付記するとすれば、①展示をはじめとする職員の業務・研究支援、②後世へ引き継ぐ「博物館コレクション」としての図書資料の収集・管理、③開かれた専門図書館、④博物館の展示・収蔵資料・研究成果と利用者との間を「図書や文献情報を介して」橋渡しをするための情報整備と利用者支援、⑤レファレンス等図書室業務の成果を博物館活動へとフィードバックする、⑥館の活動を記録するアーカイブ、があげられる。図書室だけでなく、博物館全体でこれから目指すべき地点を検討することが必要であり、これまで積み重ねてきた業務を含め、現在できることを地道に実践してゆくことが大切と考えている。

(謝辞)

今回の英国訪問調査に際して、セインズベリー日本藝術研究所の平野明氏には訪問先選定の段階から様々なアドバイスを頂戴し、大英博物館内各図書室の調査ではアジア部のTavian Hunter氏、矢野明子氏にコーディネートのご尽力をいただいた。また、大英博物館のAntony Loveland氏、Gaetano Ardito氏、

Charo Rovira氏、Lousie Ellis-Barratt氏、V&AのDr. Rupert Faulkner氏、ナショナル・アート・ライブラリーのElizabeth James氏、Victoria Worsfold氏をはじめ、本稿では紹介できなかったが、訪問を快諾し多くの示唆を与えてくださった各館の皆様、オンライン・アンケートに協力いただいた機関の皆様は心より御礼を申し上げます。

【註】

- 1) “London Art History Libraries Forum”. <http://lahlf.weebly.com/> 尚、本稿中で紹介したWebページはすべて2019年1月15日に最終閲覧。
- 2) “COPAC”. <https://copac.jisc.ac.uk/> : イギリス・アイルランドの蔵書横断検索サイト。国立図書館、大学図書館、博物館図書室など様々な主題コレクションを扱う110以上の図書館が参加している。
- 3) “SurveyMonkey”. <https://jp.surveymonkey.com/> を用いて博物館図書室の運営に関する選択（一部記述）形式の設問を送付し回答を受付けた（回答受付機関：2018年3月6日～20日、設問内容：1. 図書室概要・職員体制 2. コレクション管理 3. サービス 4. 資料の保存・修復 5. デジタル化 6. 内部連携・外部連携 ほか）。また、訪問機関である大英博物館内の各ライブラリーとナショナル・アート・ライブラリーにも調査希望内容を伝えるツールにSurevyMonkeyを用いて同様の質問を送付し、訪問時もしくは記入にて回答をいただいた。依頼を送付した19館4室のうち7機関（訪問機関を含む）から有効回答を得た。オンラインアンケートの実施については吉荒ゆうき氏（アートローグ）に協力いただいた。
- 4) アーカイブには、①組織内で作成され非現用段階となった文書のうち永年保存と判断された記録史料群「組織アーカイブ」、②作家の残した日記や手帳など組織文書とは出所を異にする「収集アーカイブ」があり、アーカイブという言葉は③その移管先である保存利用施設・機能も表している。本稿では便宜上「(博物館の) アーカイブ」という語を博物館の歴史や収蔵品に関わる文書、記録、ドキュメント類（リーフレットや記事の切り抜き等）、刊行物等を包括する記録史料群とその保存利用施設を指す語として用いている。
- 5) Francesca Hillier. “The Round Reading Room at the British Museum”. <https://blog.britishmuseum.org/the-round-reading-room-at-the-british-museum/>
- 6) Otto Zardetti. *Zehn Bilder aus Süd-England oder: Wanderungen und Betrachtungen eines Katholiken, etc. [Illustrated.]*, 1877, p. 185. <https://www.flickr.com/photos/britishlibrary/11117856633#dcId=1546948122638&p=1>（大英図書館がFlickrを通じて提供している書籍の画像〈パブリック・ドメイン〉から転載）
- 7) The British Museum. “The Paul Hamlyn Library”. https://www.britishmuseum.org/about_us/news_and_press/statements/paul_hamlyn_library.aspx
- 8) The British Museum. “The Museum's story --Architecture--King's Library”. https://www.britishmuseum.org/about_us/the_museums_story/architecture/kings_library.aspx
- 9) The British Museum. “Museum libraries and archives”. https://www.britishmuseum.org/research/libraries_and_archives.aspx
- 10) イギリス・先史ヨーロッパ部図書室提供資料「Table of changes of departmental name」をもとに作成。訪問時のインタビューや以下の大英博物館公式サイトからの参照情報から“Greek & Roman Antiquities”、“Conservation & Scientific Rsearch”の創設年について一部修正・補記している。
 - ・ The British Museum. “The Museum Story—History of the Collection”. https://www.britishmuseum.org/about_us/the_museums_story/the_collection.aspx
 - ・ The British Museum. “Collection and research departments”. https://www.britishmuseum.org/about_us/departments.aspx
- 11) The British Museum. “Libraries catalogue online”. <http://libraries.britishmuseum.org/> 大英博物館内の各ライブラリーの蔵書や電子資料をワンストップで探せる横断検索。アジア部日本セクションの蔵書ほか、データ未登録の図書資料もある。
- 12) The British Museum. “Collection online”. http://www.britishmuseum.org/research/collection_online/search.aspx

大英博物館の収蔵品画像データベース。

- 13) “The M25 Consortium of Academic Libraries”. <https://www.m25lib.ac.uk/> ロンドンの環状高速道路M25motorwayの内側に所在する60以上の研究図書館によるコンソーシアム。ワンストップの横断検索、相互利用等の連携を行っている。大英博物館の職員はARLCを通して利用者登録をすることでM25加盟の図書館を利用できる。東京都で例えれば「環状七号線内側に所在する研究図書館の相互連携」といったところか。
- 14) 平野明. “日没處の日本美術図書館：Japanese Art Libraries in the United Kingdom”. http://www.momat.go.jp/am/wp-content/uploads/sites/3/2015/05/J2014_13Hirano.pdf
- 15) NACSIS-CAT. <https://ci.nii.ac.jp/books/> 日本の国立情報学研究所（National Institute of Informatics =NII）が運営する総合目録。
- 16) “The netsuke collection of the British Museum”. <https://sketchfab.com/britishmuseum/collections/the-netsuke-collection-of-the-british-museum>
- 17) “Ukiyo-e Online Database for the collection of the British Museum”. http://www.dh-jac.net/db/nishikie/search_bm.php
- 18) 大英博物館日本古典籍閲覧システム. http://www.dh-jac.net/db1/books/search_bm.php
- 19) V&A. “Building the museum.” <http://www.vam.ac.uk/content/articles/n/national-art-library-great-exhibition-collection/>
- 20) V&A. “Book collections”. <http://www.vam.ac.uk/page/b/book-collections/>
- 21) National Art Library (V&A). “OPAC”. <https://nal-vam.on.worldcat.org/discovery>
- 22) WorldCAT. <https://www.worldcat.org/> 米OCLC（Online Computer Library Center）が運営する世界規模の総合目録
- 23) National Art Library. “Subject Guide”. <https://nal-vam.on.worldcat.org/courseReserves/landing>
- 24) 水谷長志「ミュージアムライブラリの可能性」『図書館雑誌』2004年、Vol.98, No.7、pp.438-441

【その他参考文献】

- ・デイヴィッド・M・ウィルソン著、中尾太郎訳『大英博物館の舞台裏』平凡社、1994年
- ・出口保夫『物語大英博物館：二五〇年の軌跡』中央公論社（中公新書）、2005年
- ・compiled by Elizabeth James. *The Victoria and Albert Museum : a Bibliography and Exhibition Chronology, 1852-1996.* Fitzroy Dearborn in association with the Victoria and Albert Museum, 1998
- ・edited by Rowan Watson, Elizabeth James, Julius Bryant. *Word & image: art, books and design: from the National Art Library.* V&A Publishing, 2014
- ・Robert Anderson. *The Greatcourt and the British Museum.* British Museum Press, 2000